

佳作

## 私の背負つもの

福岡県 福岡県立筑紫丘高等学校二年 木原 一星

二〇〇八年、母は四十一歳で私を産んだ。世間的に見れば後期高齢出産になる。母は私を産む前に一人の子を妊娠したが、年齢が大きく関わり無事に出産することはできなかつた。私が五歳の時、母は男の子を妊娠した。超後期高齢出産とされる四十五歳以上の出産は非常にリスクも高く、無事に産める確率はとても低かつた。

私の弟として産まれてきてくれるはずの男の子の最期は母のお腹の中で迎えられた。私は三人兄弟の次男として今を生きていた世界もあったのだろう。実際は一人っ子で両親の年齢を考えてもこの先兄弟が出来る未来はない。しかし、二人の兄弟がいたかもしれない私は親からの生まれ生きてくれた「感謝」と、兄弟二人分の「想い」を昔からたくさん聞いていた。そのため、私は私の近くにいる家族を何よりも大切にしていた。母や父、祖父、そして従兄弟。兄弟がいない私にとって全員が私の人生に何よりも大切で大好きだつた。

そんな中で、私が小学五年生の時、祖母は十万人に一人とも言われる病に罹り、そして亡くなつた。みるみる分らないのだから、当時の私に分かるはずもない。その日はもう何も考えられず、翌日親に言われるがまま葬式会場に行った。葬式会場に着き、従兄弟の遺影が目に入った途端、一気に悲しみと辛さが訪れ号泣したのを覚えていた。その瞬間から私は従兄弟が亡くなつた現実を実感し始め、それから一週間以上はそれまでにないほどの絶望を味わっていた。こんな作り話のようなことがあるのか、なぜこんなにも身近な人の死を経験しなければならぬのか、答えのない問いに答えを求め続けて辛さ、悲しみなど本当になんとも言えない感情に押し潰されそうになつた。

自分がやっていることに価値を見出せないまま、すぐに従兄弟の初盆がやって来た。どんな顔で二人の従兄弟に会えば良いのかを考えていた。しかし、その心配が不必要になるほど二人は優しく接してくれた。一番辛いはずの二人が笑顔で明るく、まるで何もなかつたかのように。辛くないはずがないのに。私に気を遣ってくれていることも伝わつたがその姿は私に元氣と考え方を変えさせるきっかけをくれた。決して悲しみが消えたわけではなかつたけれど、「死」をただの辛い経験で終わらせないことの重要性に気づけたと思う。

私は同級生の誰よりも身近な人の死を経験してきていふと思う。両親が起こしてくれた奇跡によって自分は生きていくこと、今日を過ごすことができ、明日が自然とやってくることを当たり前だと思える現在。これはどれ

痩せ細り、髪が抜け弱っていく祖母の姿は私に恐怖心さえ与えた。祖母の最後のお見舞いで祖母は当時の私の手が碎けるほどの力で、私の手を握り締めた。ベッドで横になり、一人では何も出来なくなっていた姿からは想像もできないその力は、当時の私には痛みを与えるものでしなかつた。しかし、いま考えてみれば祖母は私に言葉で伝えられない分の愛情を伝えてくれたのかもしれない。私の大切で大好きな家族が亡くなつた当時は「死」を消極的なものとしか考えられなかつた。

そして、私の大嫌いな「死」がまた訪れた。産まれた時から、一人っ子だつた私にとって年上の従兄弟は憧れで尊敬もしていた。その三姉弟の一番下の弟は一番歳も近く親しみやすく優しくてたまらなく大好きだつた。年に二回、お盆とお正月の親戚が集まるときしか会うことは出来なかつたけれど、その機会は私に元氣を与えてくれるものだつた。まさか、従兄弟と会うことが辛くなるなんて思いもしなかつた。

私がGW期間に部活から帰ると、母に部屋から呼び出され、真剣な表情で従兄弟が亡くなつたことを伝えられた。その瞬間は全く何を言っているのか分からず、頭を整理するのにも十数分が経過していたと思う。状況を理解してからも突然の出来事に悲しみはほとんどなく、ただ驚きの感情でいっぱいだつた。死因は部活で行つた野球の大会中に打者が打つたボールが従兄弟の心臓に直撃し即死したとのことだつた。今思い出しても意味が

も誰もが出来ることではないと考えられるようになったのは、私の兄弟や祖母、従兄弟の死によるものだ。誰も死なないことが何よりも幸せなことだが、変えられない過去から、何か得られるものを無理やり見出し、自分の成長やこれからに繋げることが大切だと思つている。私には、生きる権利があるとともに、生きることを願いなから、この世を去つた人の分を自分が明るく生きる義務がある。思う存分人生をやりきつた後に、みんなに楽しんできたぞと言つてやりたい。